

天王塚古墳

長野県上伊那郡箕輪町
緊急発掘調査報告書

昭和57年

箕輪町教育委員会

天王塚古墳

昭和57年

箕輪町教育委員会

序

箕輪町教育委員会

教育長 樋口彦雄

昭和54年より57年に至る4年計画で、町が事業主体となり、国・県の補助を得て、農村基盤総合整備事業上棚工区は場整備工事を行った。昭和54年に御射山遺跡、昭和55年には澄心寺下遺跡を工事にともない調査し報告した。昭和57年は本は場整備工事の最終回の天王塚古墳の報告書である。

調査結果については章を追って明らかにするが、古墳を博物館の庭に移転復元し、出土品を博物館に陳列できることである。本文第3節、歴史的環境にくわしく書いてあるが、天王塚古墳を、東方山頂の萱野遺跡——御射山遺跡——澄心寺遺跡——天王塚古墳——博物館と線で結ぶ、これも昔の箕輪町を知り、これから箕輪町を考える重要な手がかりになると思う。

古墳の発掘調査は、経験が比較的少ないが、調査手順もよく研究して正確を期して行われた。

発掘に協力された皆さん、報告書作りにあたられた関係各位に厚く御礼を申しあげます。

例　　言

1. 本書は、長野県上伊那郡箕輪町大字三日町374-5番地に所在する天王塚古墳の調査報告書である。
2. 発掘調査は昭和57年8月30日～9月14日まで実施し、引き続き整理作業を行った。
作業分担は次の通りである。

土器の復元——福沢幸一　　遺構実測図の整理——五味純一、山内志賀子、竹入洋子、柴登巳夫
土器実測、トレース——竹入洋子、鉄器実測、トレース——柴登巳夫　　写真図版の作成——山内志賀子、柴登巳夫
3. 本書に掲載した遺構の写真は柴登巳夫が撮影したものを使用した。尚、出土遺物の撮影は征矢進氏に協力いただいた。
4. 石質の鑑定は樋口彦雄氏（箕輪町教育長）にご教示いただいた。
5. 本書の執筆は丸山敏一郎、柴登巳夫、竹入洋子が行った。
6. 本書の編集は発掘調査団が行った。
7. 本古墳は箕輪町郷土博物館前に移転復元されている。
8. 本書の資料は、箕輪町郷土博物館に保管されている。

本文目次

題　　字	教育長 楢口彦雄
序	" "
例　　言	
本文目次	
付表目次	
挿図目次	

第Ⅰ章 遺跡の立地	1
第1節 位　置	1
第2節 自然環境	3
第Ⅱ章 発掘調査の経過	5
第1節 発掘調査に至るまで	5
第2節 調査の概要	5
第3節 発掘調査日誌	7
第Ⅲ章 古墳と遺物	9
第1節 古墳周辺の状況	9
第2節 墳丘の調査	10
1. 調査前の状況	10
2. 現状の配石状況	12
3. 石　積	13
第3節 内部主体の調査	15
1. 羨　道	15
2. 玄　室	15
3. 前　庭	16
第4節 副葬品	16
1. 石室内副葬品の出土状況	16
2. 石室外遺物の出土状況	17
3. 副葬品	17
(1) 直　刀	17
(2) 金環、銅環	17
(3) 鉄　鎌	21
(4) 刀　子	21

(5) その他の鉄製品	21
(6) 出土土器	23
(7) 砥石	24
第IV章 まとめ	26

付表目次

第1表 天王塚古墳出土土器一覧表	25
------------------	----

挿 図 目 次

第 1 図	位 置 図	1
第 2 図	遺跡周辺の地形	2
第 3 図	周辺遺跡分布図	4
第 4 図	古墳周辺の地形と発掘区設定図	9
第 5 図	填丘実測図	10
第 6 図	遺構全測図	11
第 7 図	配石状況図	12
第 8 図	遺構断面図	13
第 9 図	石室展開図	14
第 10 図	直刀実測図	17
第 11 図	遺物出土状況分布図	18
第 12 図	鐵鎌、刀子実測図Na- 1	19
第 13 図	" Na- 2	20
第 14 図	金環、銅環実測図	20
第 15 図	出土土器実測図	22
第 16 図	砥石実測図	24

図 版 目 次

図 版 1	調査前近景 完掘後の状況
図 版 2	調査進行状況
図 版 3	遺物出土状況
図 版 4	"
図 版 5	"
図 版 6	"
図 版 7	"
図 版 8	側壁及び羨道部状況
図 版 9	奥壁及び玄室配石状況
図 版 10	側壁裏積み状況
図 版 11	周溝及び土層状況
図 版 12	調査スナップ

図版 13 出土金属器と砥石

図版 14 鉄 錠

図版 15 刀 子

図版 16 出土土師器・須恵器

第Ⅰ章 遺跡の立地

第1節 位 置 (第1図)

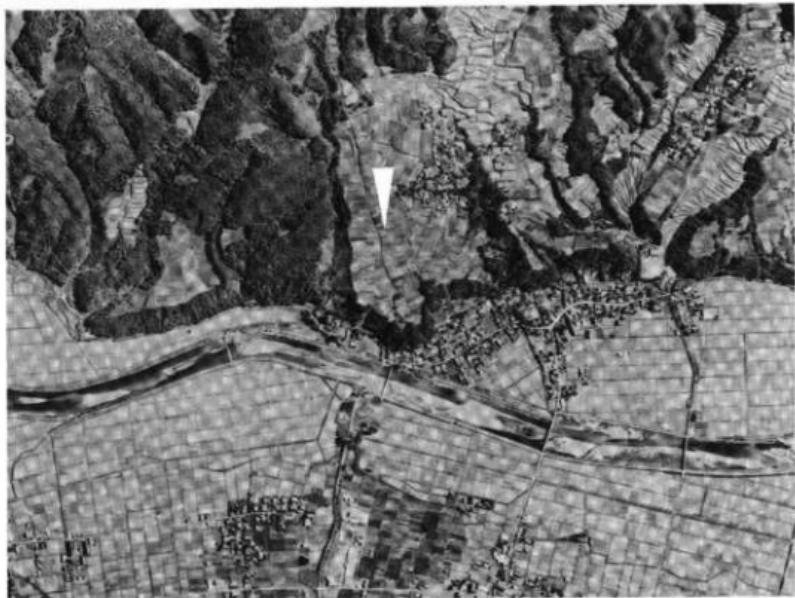
天王塚古墳は、長野県上伊那郡箕輪町大字三日町375-5番地に所在する。西にゆるやかな傾斜面を呈した扇央部に位置し、箕輪町を一望にできる場所である。国鉄飯田線木下駅の北東約1kmほどにあり、遺跡地の標高は740m前後で、眼下を流れる天竜川との比高は約70mを計る。



第1図 位 置 図

第2節 自然環境

箕輪の町を東西に二分するように流れる天竜川は、広い沖積面と河岸段丘地形を形成している。天竜川西の地域は経ヶ岳麓から東方に流下する小河川、即ち、大泉川・帶無川・深沢川等によって複合扇状地形が形成されている。河川の運搬堆積によってでき上がった複合扇状地形は東方に向って緩やかな傾斜をしている。天竜川左岸（竜東）は背後にすぐ山を控え、その山地を侵蝕して西方に流下する小河川により、変化の多い扇状地形を形成している。又、山が急傾斜で河川の流れが早いため、一時に激しい出水で大量の土砂を押し出すため「大井川」のような特徴ある地形を見ることもできる。扇状地は天竜川とその支流によって順次侵蝕され、雛段形の段丘を形成し、各段丘面は、厚さ6m余のローム層に覆われ、多くは畠地、及び部落のある台地となっている。このように東西の地形もかなりの相違を見ることができるが、背後に控える山地の主な岩石も違っている。西方のそれは粘板岩・砂岩・チャートなどである。東方の山地は花崗岩・閃緑岩・結晶片岩類であり、一帯は花崗岩の風化した砂土を多く見ることができる。遺跡の位置する地形は南西に傾斜する扇尖部上にあり、まさに箕輪の地を一望にできる遠望の開けた所である。北には山を背負い、東側には豊かな湧水の出る所があり、日当り、遠望といい、住居をかまえるには絶好の場であったと思える。ここ上棚部落一帯は多くの遺跡が密集しており、竜東における一大遺跡地帯を形成している。



第2図 遺跡周辺の地形

第3節 歴史的環境

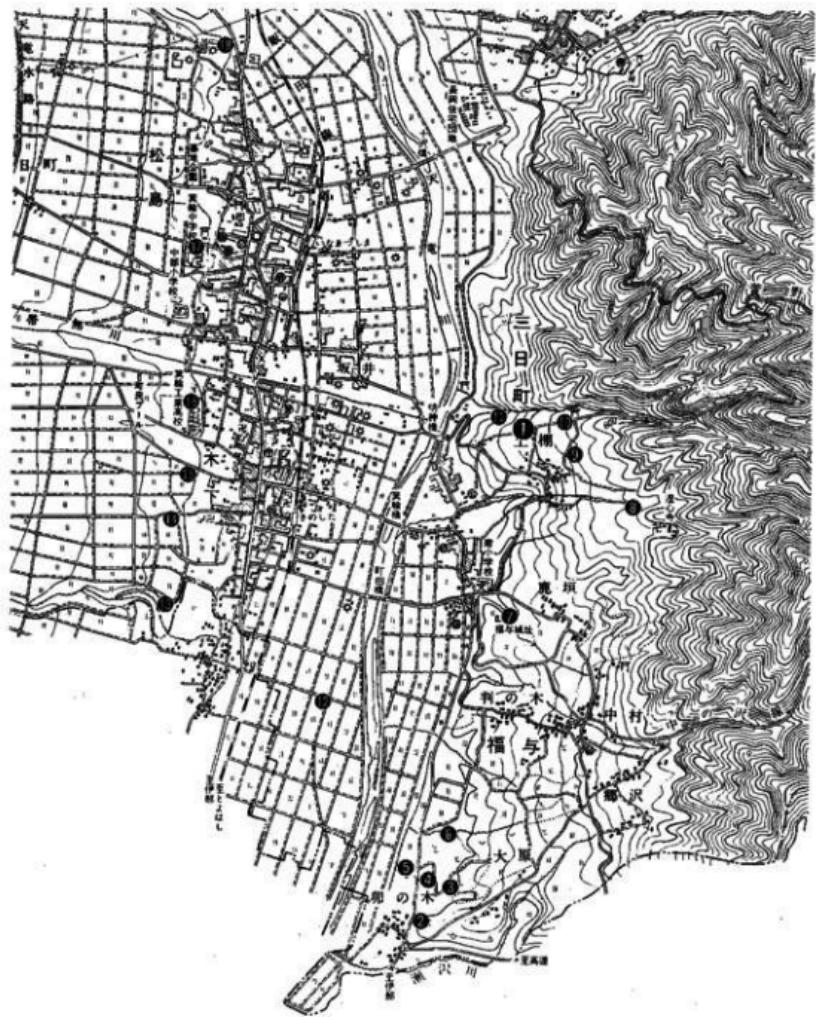
天王塚の位置する天竜川東の扇状台地は、先史より近世に至るまで、実に豊富な歴史的環境にある。この地盤における発掘調査も本発掘で4回を数え、遺跡地の多いことを物語っている。本古墳の東方約200m上には縄文時代中期（井戸尻III～曾利I）の大集落である「御射山遺跡」が位置し、昭和54年度にその調査が実施された。同調査時に御射山神社の舞台跡ではないかと推測された柱穴列址も検出されている。又、この遺跡の東南約400mには澄心寺遺跡が位置し、ここからは多数の押型文土器が出土している。(1)、東方山頂（標高1,200m）には萱野遺跡があり、ここからも押型文土器を中心とした縄文早期の土器が検出されている。(2)、このように山頂から扇端部にまでいたる所に遺跡が存在し、居住性の豊かさを示している。今回調査した「天王塚古墳」と同時代と考えられる古墳が、現上棚部落の中に一基確認されている。「おしりよう様」と呼ばれているが、わずかに石の頭部が三つほど見えるだけで、古墳の形態はほとんど留めていない。この位置から上方御射山遺跡近くにまで、平安時代の遺物が多数出土しこの時期において人々の生活があったことを物語っている。又、東方の山に入る場所の小高い所に「御射山社」が祭られている。

注1. 昭和55年・56年と発掘調査されたもので、56年度に緊急調査された澄心寺II遺跡からは多数の押型文土器及び石器が出土した。それ等の多くはいわゆる細久保式といわれる範に入るものが多い。又石器は凹石と特殊磨石が多く見られる。

注2. 萱野遺跡は昭和38年秋に箕輪町教育委員会により、故藤沢宗平氏を団長として発掘調査された。遺物は縄文時代早期の押型文土器、石鏃・磨石が検出された。遺構は一ヶ所のピットと住居らしい平らな一部が検出されたが、確定するまでには至らなかった。出土遺物は箕輪町郷土博物館に展示されている。

注3. 御射山三社の本社は三日町唐沢家（神職）の上方にあり、その場所を古来（神府・御室）と呼び、9月の例祭にはこの神府社と箕輪南宮神社秋宮の神体とを神輿で三日町上棚東方の山麓にある御旅所に遷して行われる。これを穗原御狩の神事という。
又、箕輪南宮神社にある神体は、9月の例祭に御旅所へ上って御射山三社の祭神のうちに加えて祭りが行われ、12月27日の夜、御神渡神事によって木下の春宮に遷され、7月の南宮神社の夏祭り後また秋宮に遷される。
御射山三社には戦国の当時、武田信玄・木曾義昌がそれぞれ社領を寄進している。
箕輪遺跡内にある御室田地籍はこれ等の神事と何かの関係を持つ場所ではないかと考えられる。

（柴 登巳夫）



- 天王塚古墳 ②上金 ③矢田 ④矢田尻 ⑤北垣外 ⑥黒津原 ⑦福与 ⑧澄心寺下 ⑨田畑
- ⑩御射山 ⑪馬場 ⑫元輪 ⑬猿楽 ⑭南城 ⑮北城 ⑯上の林 ⑰中山 ⑱王墓古墳

第3図 周辺遺跡分布図

第II章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至るまで

本地区は箕輪町三日町地籍の天竜川左岸台地上に位置する水田および畑作地帯で、地区一帯は水田と畑が点在し、排水の悪い湿田が多く、区画も不整形で小区画であり、農業機械の導入にも支障をきたしている現状であった。このような現状を打開するため、又、水田の多目的利用のための乾田化ということも合せ、昭和54年度から農業基盤整備事業圃場整備事業上棚工区として事業が計画実施されているのである。それに伴ないこれまでに3回の発掘調査が計画実施された。今年度の圃場整備事業計画区内に天王塚古墳が位置しているため、昭和57年度に入り、県教育委員会文化課の指導のもとに調査計画を立案した。その後、日本考古学協会員、丸山敏一郎氏を团长とする調査団を組織し、記録保存を目的とした緊急発掘調査を実施する運びとなり、以下に記すような内容となった。なお発掘調査終了時におき、本古墳の移転復元が計画され、箕輪町郷土博物館前庭に移転復元された。

第2節 調査の概要

- 遺跡名 天王塚古墳
- 所在地 長野県上伊那郡箕輪町大字三日町374-5番地
- 発掘期間 昭和57年8月30日～9月14日
- 調査委託者 箕輪町長 桑沢 章
- 調査受託者 箕輪町教育委員会
- 調査会、調査団の構成は下記の通りである。

調査会

会長	市川脩三	町誌編纂専門委員
理事	荻原貞利	教育委員会社会教育指導員
"	竹花久木	"
"	大槻剛	町誌編纂委員
監事	小林重男	郷土博物館専門委員
"	堀口貞幸	町誌編纂委員

調査団

团长	丸山敏一郎	日本考古学協会員（伊那弥生ヶ丘高等学校教諭）
担当者	柴登巳夫	箕輪町郷土博物館学芸員
主任	福沢幸一	長野県考古学会員

調査員 五味純一 日本工業大学々生

作業協力者

堀内徹 小林昌幸 北沢武志 山口勝博 中村哲二 清井誠弥 泉沢利夫 白鳥明美
小林淳子 竹入瑞枝 金子美智恵 山内志賀子 (順不同 敬称略)

参 与	馬 場 知 一	箕輪町教育委員会教育委員長
	原 茂 人	" 教育委員長職務代理
	戸 田 宗 十	" 教育委員
	桑 沢 良 平	" "
	荻 原 貞 利	箕輪町文化財保護審議会委員長
	藤 田 寛 人	" 副委員長
	市 川 優 三	箕輪町文化財保護審議委員
	矢 沢 齊 治	"
	堀 口 貞 幸	"
	小 林 健 男	"
	小 林 正 之 進	"
	山 崎 義 芳	"
	唐 沢 忠 孝	"
	上 田 啓 男	"

○調査に関する事務局の構成組織は下記の通りである。

橋 口 彦 雄	箕輪町教育委員会教育長
坪 井 栄 寿	" 社会教育課長
太 田 文 陳	" 社会教育係長
柴 登 已 夫	箕輪町郷土博物館学芸員
竹 入 洋 子	"

(文責 事務局 柴 登已夫)

第3節 発掘調査日誌

○8月30日(月) 晴

本日より調査を始める。

先ず、資材運搬、テントの設営、調査範囲の草取り等をして調査の用意。神事を行ない発掘の安全を祈る。現況の撮影と地形測量。

墳土を四等分するようにベルトを残し第一区から排土を開始する。第三区には袖石の配列状況が現れる。天井石や、袖石は持ち去られているという予想であったが、意外に残っている感じである。墳丘南側(羨道部)を中心に須恵器片が20片ほど出土する。

○8月31日(火) 晴

ベルトを残し、1~4区の全体に調査範囲を広げる。團長さんと現場作業の今後の予定を打ち合せる。地主さんが来られ、墳丘上の石の状況(これまでの形、石の動いた様子等)について話された。午後になり墳丘東側に南北に袖石の配列状況がはっきりとして来た。これに対応するように西側に袖石列が検出されることを考える。土師器の高杯等出土。

○9月1日(水) 晴

石の上にある土をほとんど取り除く。蓋石に用いたと思われる石が多数見える。土を取り除了いた状況の石の配置を平板測量を始める。この作業は大変である。石室を形作る南北二列の袖石がはっきりする。羨道部分の配石も少しづつ状況が現れる。

○9月2日(木) 晴

石組み状況の写真撮影、レベル実測、平板測量を続ける。遺物は羨道部前から集中して出土している。

○9月3日(金) 晴

石室内に落込んだ石の取り出し作業。石室を形作る石を平板実測。石室に蓋石が1枚落ちてい



る。羨道部の状況がほぼ検出される。石室の状況もほぼ現れる。

○9月4日(土) 晴

午前にチェンブロックによる大石の取り除き作業、石室内部の調査を始める。鉄錆、鉄片等出土。午後教育長さん、文化財保護審議会長視察。石室内の土は全部篳にかける。

○9月5日(日) 晴

石室内の調査を続ける。午前中に金環出土、鉄錆も多数出土する。石室内部の状況を尺度20分の1で平板実測、直刀の一部見え初める。出土遺物は、位置・レベルを全部記録する。町長さん視察。

○9月6日(月) 晴

石室内部の調査。墳丘外周の掘り上げ作業。南側より須恵器(平瓶)多数出土。石組状況の平板実測。レベル測量。

○9月7日(火) 晴

石組の平面測量。両袖石内側からの側面実測。両袖石は外側に少しづつはみ出て、上部になる程石が広くなっている。石室構築状況の細部写真撮影。N H Kが取材に来る。

○9月13日(月) 晴

墳丘の周間に3本のトレーナーを入れる。周溝状況が少し検出されたが、あまりはっきりしない。トレーナー地層実測。墳丘全体のレベル実測。全測図の作製。羨道前から須恵器出土。

○9月14日(火) 晴

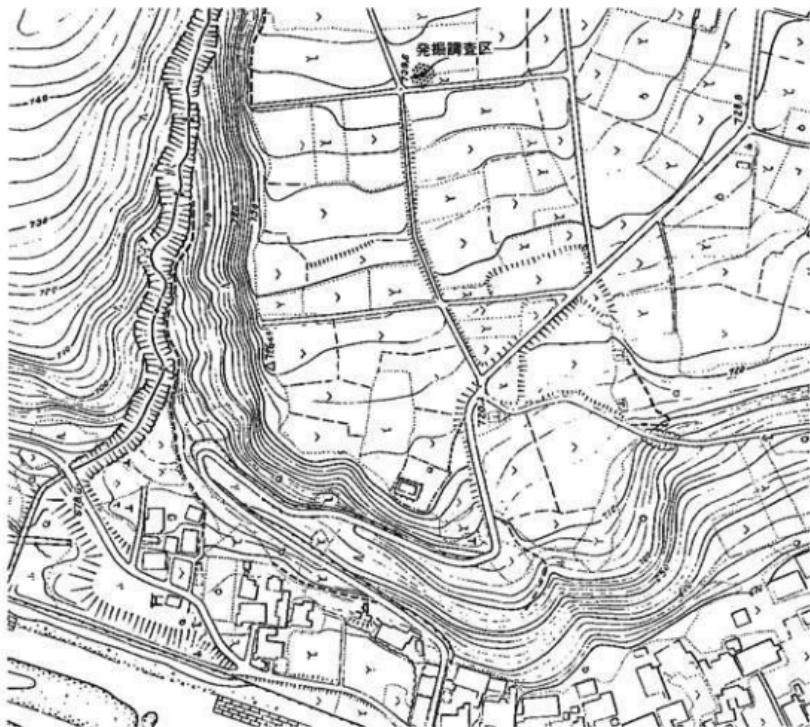
石室内部の最終調査。友野先生より全体的指導をしていただく。全体撮影、本日で現場の作業を終了。



第Ⅲ章 古墳と遺物

第1節 古墳周囲の状況

天竜川を境にして東側は竜東地区と呼ばれ、その自然環境については、前節に記したとおりである。古墳は天竜川近くまで張り出している河岸段丘を上がり、突端から約200m東に入った台地上に位置している。ここからの眺望はきわめて良く、眼下の箕輪町は一望することができ、伊那市、辰野町まで見渡すことができる。一帯を統治した豪族の首長の墓としては、最も良い場所であったと考えられる。古来より古墳は「天王塚」と呼ばれ、付近も「宇天王」となっている。現在は全くの畠地帯で、古墳の一角だけが荒地となり現在に至っている。人家は東南に100mほど離れて続いている。桑畑が多い。古墳の調査が終了すると同時に一帯は構造改善事業により地形を一変してしまう。

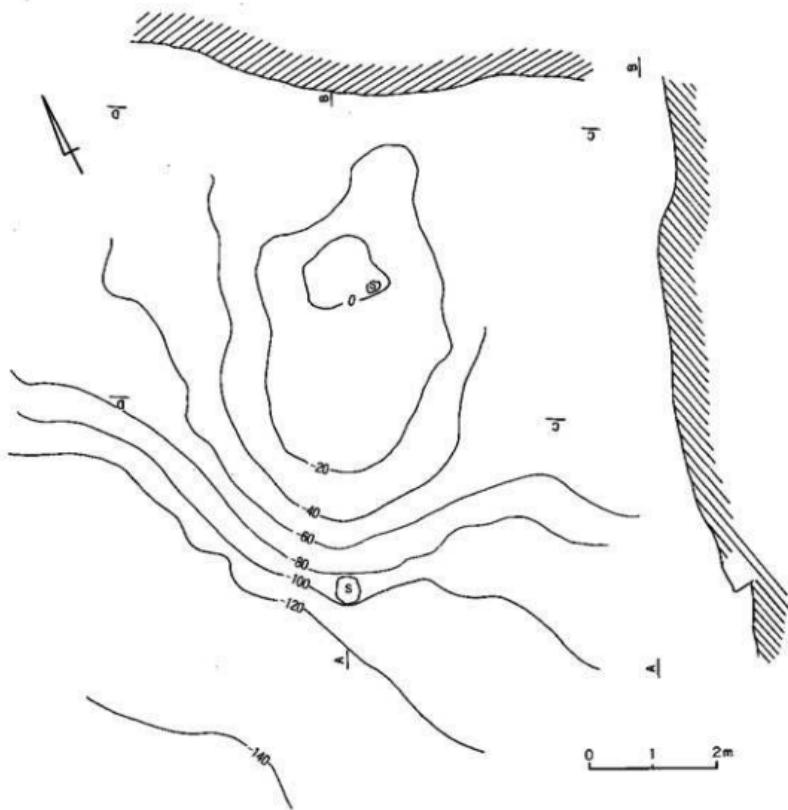


第4図 古墳周辺の地形と発掘区設定図

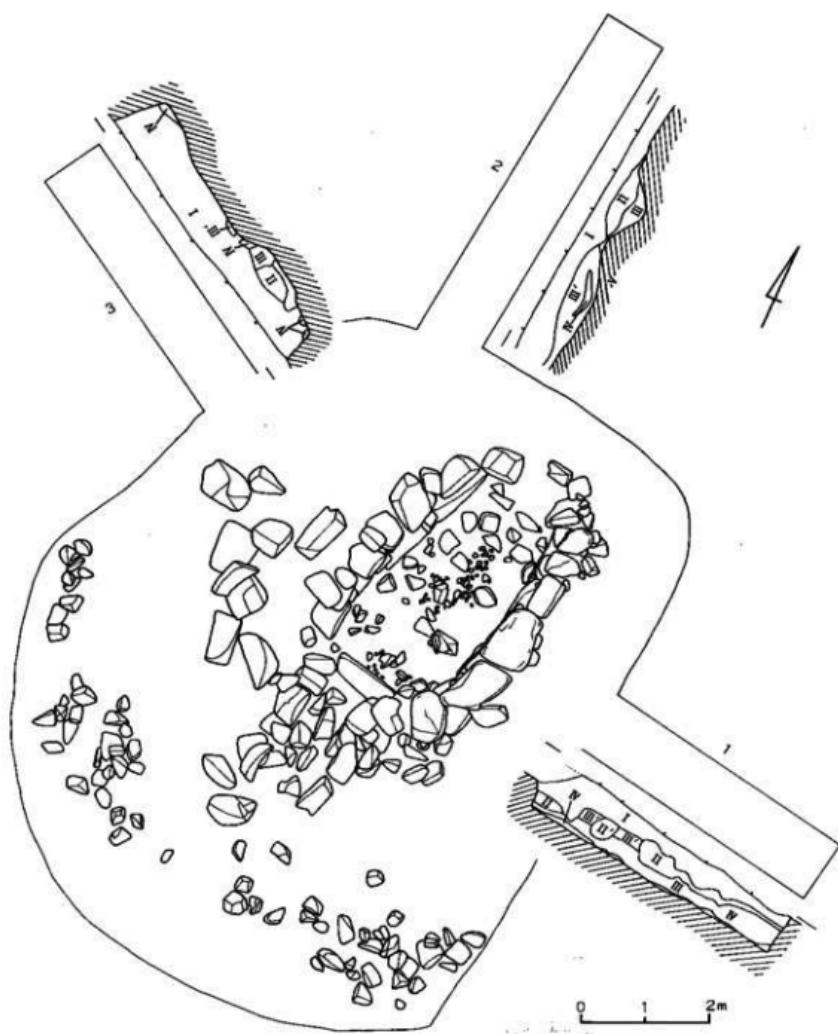
第2節 墳丘の調査

1. 調査前の状況

全国遺跡地図（長野県版）2146番に登載されているのが本古墳である。古老の話によると、以前は墳丘はかなり高く、周囲も現状より広さがあったと伝えている。戦後に墳丘から庭石とするため2回ほど石が運び出されたと伝えられている。その時、盛土が削られ、天井石、及び袖石の一部が運ばれたと考える。そのため現状の墳丘は奥壁の石がわずかに頭を出しているのみで他は草に覆われ、周囲の畑よりわずかに高くなっている。そのため石室の状況は現状においては側壁の一部を残すくらいと予想していた。これまでにおいて石を運び出す際や耕作中などにおいて、遺物が出土したということは全く伝えられていない。



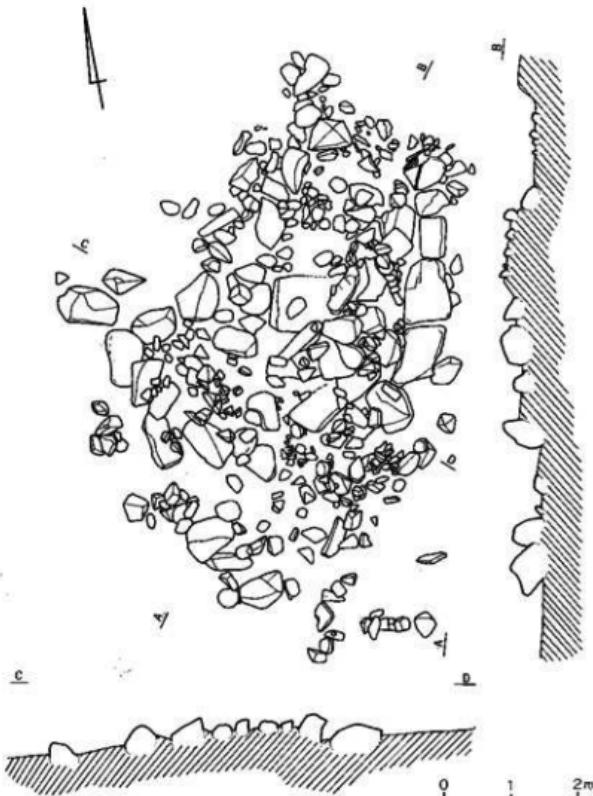
第5図 墳丘実測図



第6図 遺構全測図

2. 現状の配石状況

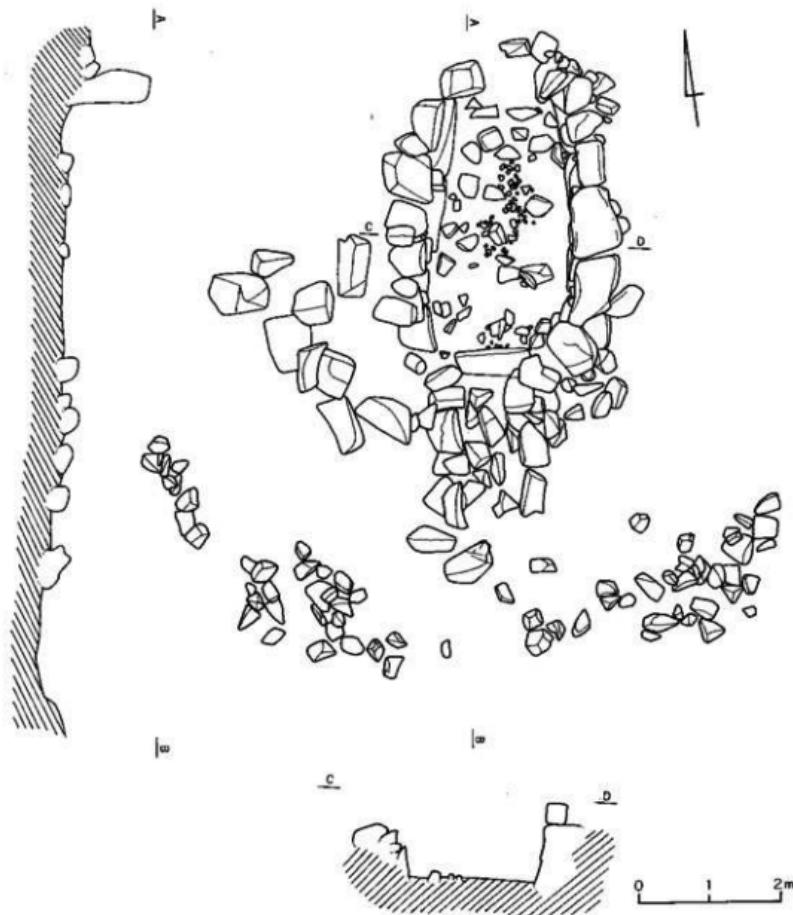
古墳の立地する地形は前述のようであり、台地は西に面して3~4度のゆるい傾斜面となっている。古墳の範囲は何等かの境界に接して、畠の角におしやられている現状である。墳丘を失っているので覆土直下に石室が現われている。わずかな覆土は毎年生い茂る雑草の腐葉土が堆積したものである。雑草を取り除いた後の古墳の形状は第5図に示すごとくで、南側（羨道部）部分がやや低く、中央の最も高い部分とでは1m~20cm余の高低差を見ることができた。この状況においては古墳の中軸線は北より東に20度程ずれると考えられていた。石室後背部においては畠が約40cm程度高くなり、羨道部にかけての古墳中軸線とはほぼ平行して地形に傾斜が認められる。覆土を取り除いた状況は、第7図に示すようである。この段階において、東側の側壁配石状況がはっきり現われている。西側においてもその一部を確認することができる。又奥壁には鏡石と称される大きな石が立たっている状態が普通であるが、東側の一つが取り除かれていることがすでにこの段階でわかった。天井石は運び出されていることがわかつていたが、石室内中央に斜めに落ち込んでいたものが一枚確認された。この段階で見る限りでは、石積に用いた石はあまり大きなものはない。



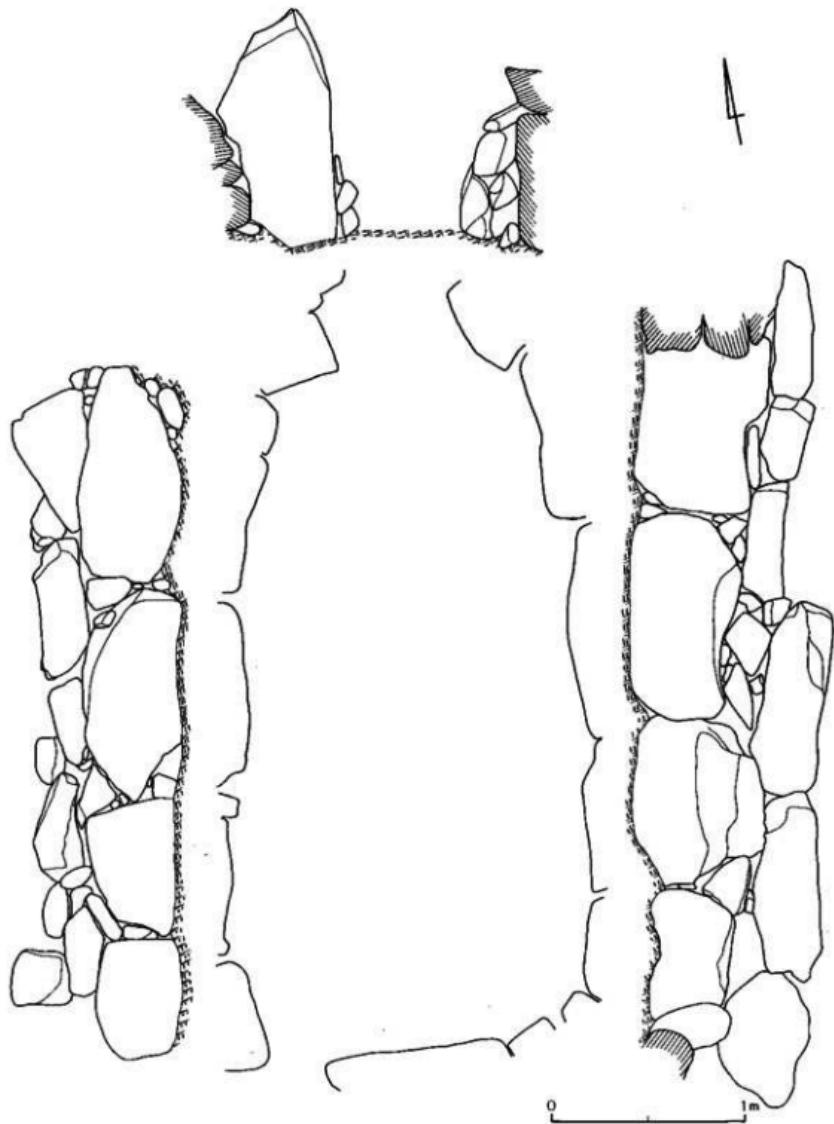
第7図 墳丘上部配石図

3. 石 積

石積み状況における平面図は第8図に、両側壁及び奥壁状況は第9図の展開図に示した。石室内や羨道上部を覆っていた石を除去して、残存した両側壁と奥壁及び羨道が現われ、構築された石室の状況をほぼ推定することができる。天井石及び側壁の一部は填土が削られ天井石が運び出された際に破壊され、その一部が西壁の横に10個ほど移動している。側壁の構築状況において、基盤に接する根石は基盤のローム層中に埋め込まれて、平らな面を石室内に向かって立てる状態で構築している。これは側壁を取りはずす段階で確認できたことであり、それまでは予想もし



第8図 遺構断面図



第9図 石室展開図

なかった状況を呈していた。そのため、立てられた石は、不安定なため、大小の石で裏積みがしっかりと施されている。その上に二段目の石が平らに並べられている。石室を構成する主な石はほとんどが花崗岩類で、500mほど離れた山裾から運んだものであろう。一部であるが、玄室内床面に敷かれた拳大の小石は天竜川から運ばれたと思われる。大きな石積みの間には平石や小石を入れ込み石が安定するように考えられている。側壁の二、三段目の積み石はやや外側にづれているものが見られるが、これは天井石の運び出しの際にづれたものと思う。奥壁（鏡石） 石向って左側の一つが残り、右側にも一週り大きな石があったと予想される。玄室床面より1m20cmの高さを有しているが、この高さが天井面とは考えられないため、この上に1~2段の平石が並べられ天井部へと続いたものと推測される。側壁は3段目以上は皆無であるため、その上の状況は推測するより他はないが、上積みになるにつれ、上部が内側にせり出す持ち送り状を呈するものと考える。このことは石室内に落ち込んでいた一枚の天井石の長さを考えた場合からも推測できることである。又、南側の墳丘裾部に位置する場所に第8図に見ると、人頭大の石が弧状に配列されている。これは墳丘裾部を形成する積み石の一部と考えられ、南側が低くなっているため、石積みによって墳丘裾部に勾配をつけたものと推定した。なおこの配石の一部は畠の耕作等においてかなり掘り上げられたと伝えられている。

第3節 内部主体の調査

(1) 羨道

擾乱されている上部の石を取り除くと石室の側壁に統いて、羨道を形成した配石が見られた。羨道の側壁は積み石状に残ってはおらず、一段目の根石のみであった。それによる羨道の平面的規模は、長さ2.5m、巾70cmを測る。羨道側壁の根石は、羨道と平行するように位置し、(第8図) それ等はほぼ60×30cm前後の長方形に近い形を呈している。床面は人頭大よりやや大き目の自然石を並べている。その配石状況は凹凸がはげしく、石の平らな面を上にして全体的に平らにするような配慮はなされていない。又、玄室との境を示す位置には、長さ1.5m、巾35cmの長方形の大石が据えられ区切りがはっきりつけられていた。この境に中扉があったと推測することができるが、その閉塞状況を確認するような遺構は見られなかった。又墳丘が全く削り取られているため、墳丘が羨門を覆う度合がどのくらいかも不明である。

(2) 玄室

古墳の主体部における平面的規模は、ほぼその全体を知ることができた。玄室の奥壁を北に、南に開口する羨道を有する单室の両袖式横穴式石室で主軸の方向はN15度Eである。石室の石はすべて自然石が用いられ、側壁の石は平均0.5~1トン程度のものが主体である。両側壁を形成する石のうち基盤を掘り込んで据えられている根石は、平面を内側にして立てている。このことは前述したとおりであるが、最も重量のかかる根石の据え方としては、非常に不安定な感じがする。次に玄室の規模は、長さ(奥行) 3m50cm、最も巾の広い部分で1m87cm、奥壁部で1m40cmの巾を有している。基盤の床面はローム層まで掘り込み固めら

れている。玄室内はほぼ平らになり、ローム層の上に黒色土が数センチ堆積し、その上に人頭大の石が安定よく据えられている。配石の上端レベルはほぼ一定しており、この石は遺体を入れた棺を置くための枕石と推定した。又、黒色土に混入して天竜川から運んだと思われる拳大の小石が敷かれていた。玄室の平面の形は玄門部からやや奥が最も巾広で、奥壁に行くにつれやや曲線的に狭まる状況を呈している。石室内部には排水設備と認められるものは無かった。天井石についても前述のようであるが、一枚だけ発見されたが、架構状態で残存したものは皆無でその状況は不明である。

(3) 前 庭

参道入口前の部分をいわゆる前庭部と称して、配石等の施設を有する場合があるが、本古墳においては、それに該当する施設は見られなかった。前庭部は埋葬後の墓前祭的な儀事が行われた跡といわれている。施設は認められなかったが、前庭部に該当する一帯から土師、須恵器が多数出土しており、儀事の行われたことを推測できる。

第4節 副 葬 品

(1) 石室内副葬品の出土状況

戦後における石の運び出しによる破壊以前にも、盜掘が当然あったと考えられる。しかし調査前において、本古墳から副葬品の出土があったという伝承は全く聞いていない。石室内からの副葬品の量は、同規模の古墳の例と比較して、かなり少ないと考える。金属製のものとして、直刀1、金環2、銅環1、鉄錐のうち形を留めるもの11、欠損して一部だけのもの30余、刀子のうち形を留めるもの1、欠損して一部だけのもの20余、その他の鉄片類数個である。土器類は玄門部近くに発見された1点のみである。東側壁寄りの中央から四面を使用した砥石が1点出土している。副葬品の出土位置とそのレベルについて考えると、直刀は西側壁に接するほど近くの奥壁寄りに鋒を奥に向けて位置している。基盤に近い深いレベルに入っていたことと、側壁の下に入るよう位置していたため、盜掘の際にも発見されなかっただと思われる。革の部分が欠損しているが、^{レバ}が深く革の部分が浅く傾斜をしているため、盜掘時にこの部分だけが荒されて欠損したとも考えられる。鉄錐、刀子、環等の出土レベルが石室内において深浅の差が40cmにも達し擾乱されたことを物語っている。環類は東側壁寄りから出土したが、そのうち2個は、石室内の土を、籠にかけてその中より発見したものであるため、位置は確実ではない。土器類は1点のみで、他の報告例などでは折り重なって検出されていることがよく見られるが、これも盜掘されたものであろう。玄門から少し入った東壁寄りに、基盤のローム層からわずか上に骨粉が検出された。それは3cm四方くらいのわずかなもので、骨の形は全く留めず、骨粉状を呈したものである。埋葬された人骨の一部と推測するが、土質の影響であろうか、残存人骨の少ない古墳である。

(2) 石室外遺物の出土状況

石室外からの出土遺物は、土師器、須恵器類がほとんどで、それも羨道入口から前庭部に該当する一帯が最も多い。これは埋葬後の墓前祭的な儀事における使用器とする考え方もある。墳丘裾部及び周溝と考える位置に弧状に配石が確認されているが（第8図）、このわずか外側から平瓶が2個体出土している。羨道部のすぐ前からは高杯の脚部が2個、完形のものが1個出土している。全体的にはほぼ完形になった器は9点に及んだ。又、石室外からも鉄製品の出土が数点確認されたが、いずれも鐵の柄の一部や小形の鐵片であった。繩文土器もいくつか出土しているが、一帯が土器の散布地帯となっているため出土したものである。

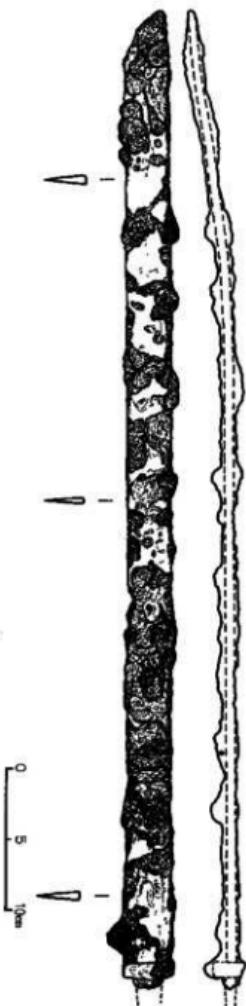
3. 副葬品

(1) 直刀（第10図）

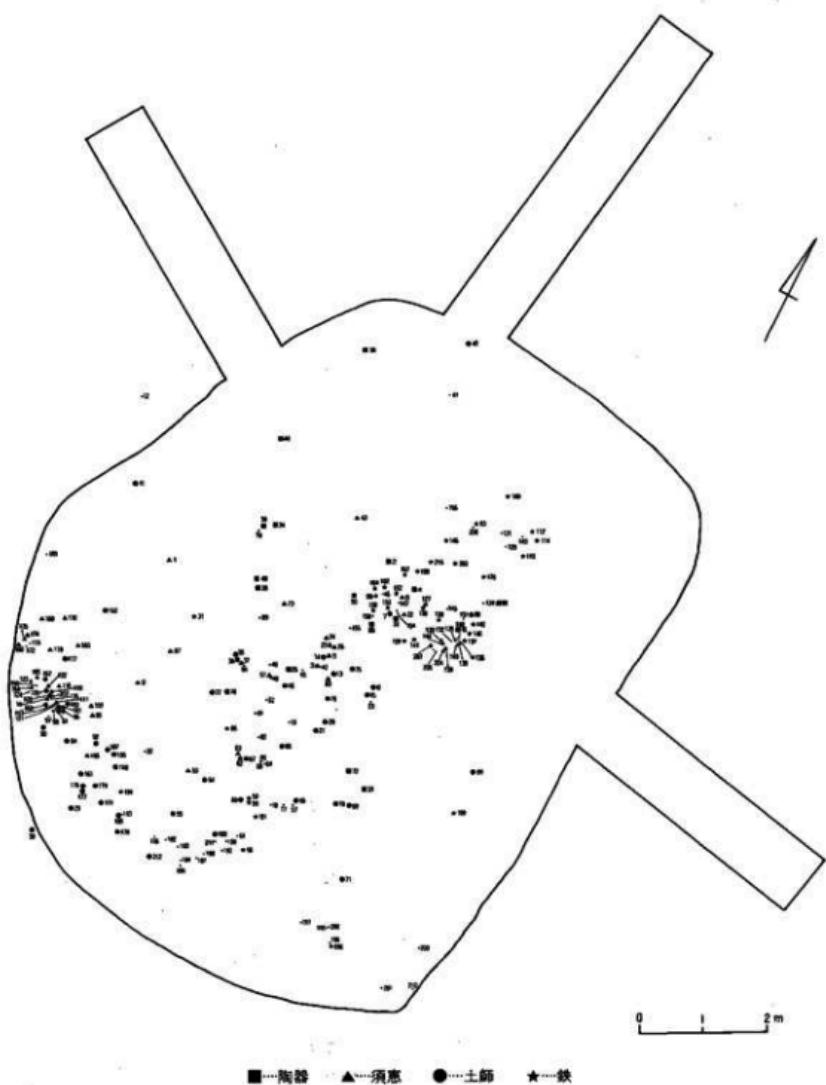
直刀は第10図に示した一振りだけで、現長70cmで基部を欠損している。したがって全長と茎部の形態は不明である。刀長と茎部の長さの比を5対1程度と考えると、全長84cm前後となる。この長さはかなりの長刀である。造りは平棟平造りで、背厚は元幅で7mm、刃幅は29mmを測り、²²峰近くまでほぼ同一で、峰の形態は「ふくら付き」である。茎はほとんど欠損しているため不明であるが、わずかに残存した部分から推定すると、茎の断面は20×4mmの長方形を呈している。棟区、刃区があるように感じられるが、はっきりは確認できない。又、^舞の一部と思われる金具も残っている。図に示すごとく峰から22cmほどの部分から一方にゆるやかに曲っている。これは副葬された後に石の落下などでそうなったものと考える。

(2) 金環・銅環（第14図）

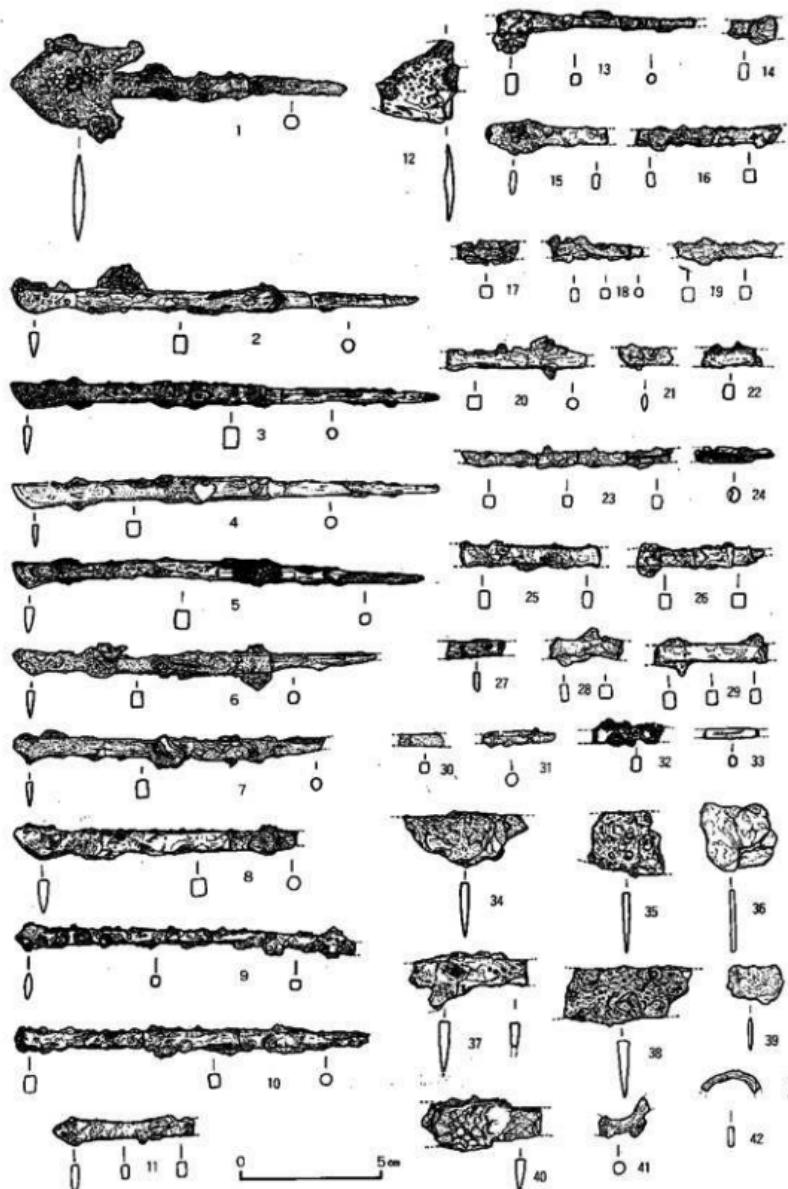
第14図1、2は石室内の堆積土をふるいにかける作業において検出されたものである。大きさ等はほぼ同じである。環の径は25mm、身部の径は7×4mmの階円形を呈している。材の両端は2.5mmほどの隙間があり、縁青が全面にふき出している。縁青の取れた部分からは金箔が見



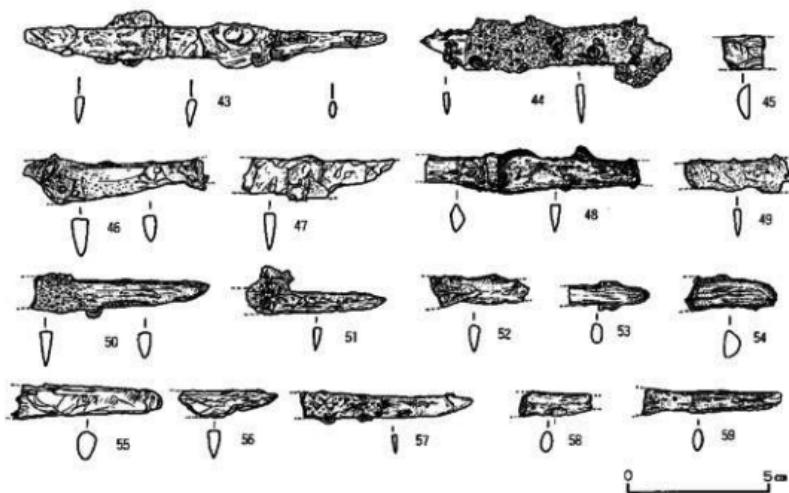
第10図 直刀実測図



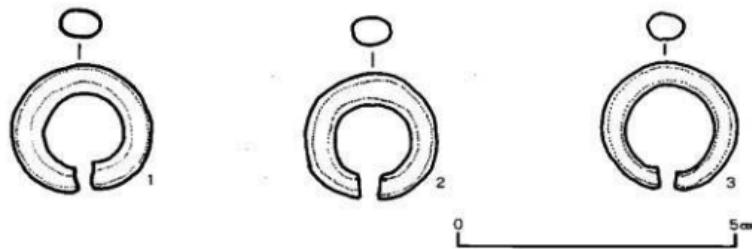
第11図 遺物出土状況分布図



第12図 鉄鎖・刀子実測図No.1



第13図 鉄鎌、刀子実測－2



第14図 金環・銅環実測

えている。3は銅環と思えるが、その割りには綠青が少ない。環の径は25mm、身部は6×4 mmの階円形を呈し、材の両端は2.5mmほど隙間がある。検出の現位置が確定しないが、東壁寄りの中央部付近である。

(3) 鉄 鏡 (第12図1~33)

鉄製出土品の中において最も多いものである。完形に復元されたものは10点で残りは欠損した部分である。それはほとんど長頸鏡で、形態的には、平根鏡、片刃鏡、三角鏡に分かれる。刀については三形式になるが頭部及び茎にかけてはほぼ一定しており、頭部は断面四角形を呈し、茎部は断面四角形あるいは円形となっている。頭部、茎部共に平均長さ6cm前後である。

イ) 平根鏡 (第12図1、12)

1は現長11.7cmで茎の先端及び、逆刺の一部が欠損しているがほぼ全形を示している。刃部は広鋒の平造りで、先端は三角式である。身幅が3.3cm、厚さ2~3mmで左右に逆刺が付けられている。形の整った飛燕形の鏡である。12も同形式の刃部の一部分である。

ロ) 片刃鏡 (第12図2~8)

長い頭部の尖端を断面三角形に打ち出し、片側が刃部になるように造り出されている。刃部の断面は平根平造りで、尖端の形状は、ほぼ同一である。茎部は頭部より一段細くなり、段違いに造り出して接続している。そのためこの部分が棘と同じような機能を有しているといえる。このことは三形式の鏡に共通していることである。

ハ) 三角形鏡 (第12図9~11)

長頸の先端を左右に幅広く三角形に打ち出したもので、9においてはその幅が9mmを呈している。幅の広くなっている部分の断面は鋸により現形を観察することは難しいが両丸造り(レンズ状を呈する)が普通のようである。

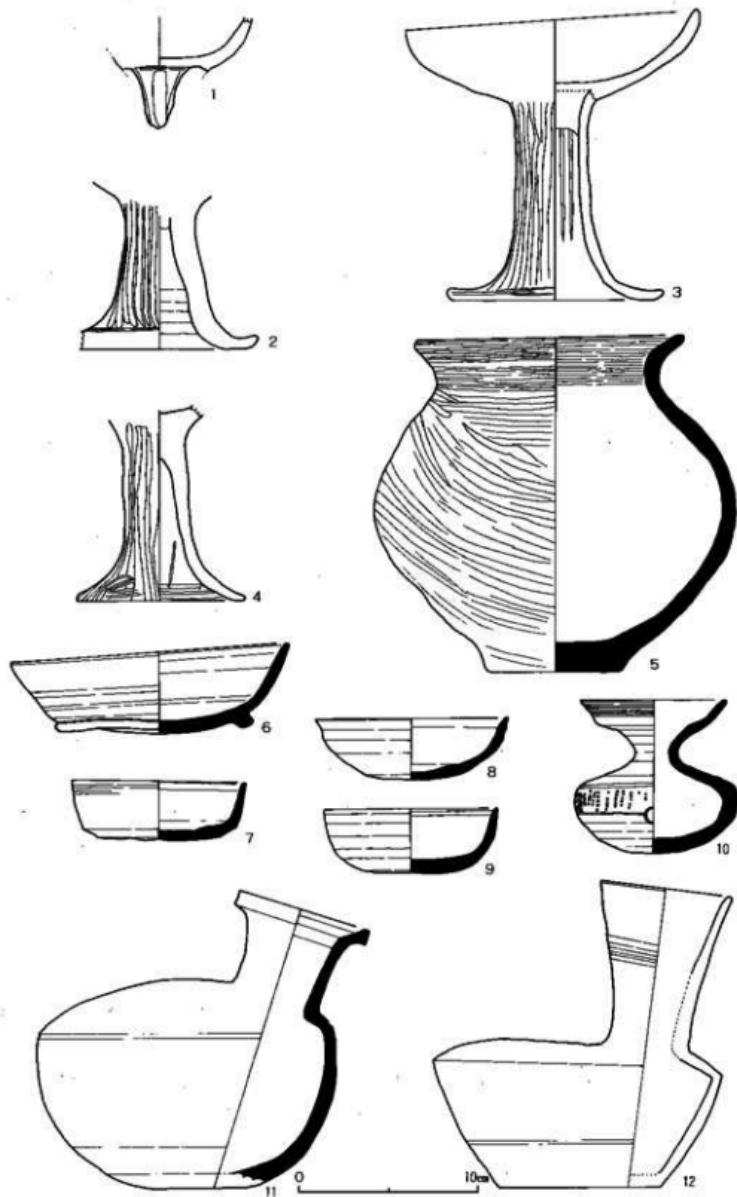
(4) 刀 子 (第12図34、35、37、38、39、40 第13図43~59)

刀子の一部分と断定できるものが20点ほど検出された。ほぼ全形を示すものは第14図43である。全長12.9cmを測るが切先の一部と茎部をわずかに欠損している。茎の長さは4.3cmを測り、わずかに内反りがみられる。刃部の棟は直線で刃幅が切先に近くなるにつれ小さくなり、切先はふくら切先になるようである。造りは平棟平造形式で両刃になり、断面形状はクサビ形になっている。13図34、35、37は一通り大きな刀子で刃幅が2cm、棟背厚4mmを測る。これも平棟平造りである。

(5) その他の鉄製品 (第12図36、41、42)

36は厚さ1mmほどの平らな鉄片であるが、どのようなものの破片か不明である。又、41、42は刀装具で直刀の鞘の装具の一部分と推測する。

以上鉄製出土遺物について記したが、出土の状況や数量、破損状態などから考え、盗掘があったものと推測される。又、古墳からは馬具が出土することが多いが、本古墳からはそれ等に関するものは全く無かった。



第15図 出土土器実測図

(6) 出土土器

土師器・高坏

1は、脚部が欠損しており坏部分である。内黒の坏で、内側は丁寧にヘラミガキが施されている。体部は少し丸味をもってやや開き気味に立ちあがり、底部と体部の境には稜をもたない。坏部と脚部をつないだ痕跡であるホゾが坏部に属しており、組み合わせ手法によってこのホゾが脚部に挿入され、接合・成形がなされたと思われる。ホゾの部分は、ヘラケズリを施こし脚部に挿入しやすいよう成形されている。

2は、脚部で、柱状部が太く、柱状部と裾部の境目がはっきりしている。柱状部は、上部から下部にタテ方向のヘラミガキが施されている。坏は、残存部から内黒坏と思われるがほとんど欠損しているため坏部分の形はわからない。

3は、柱状部が円筒形を呈する。裾部に角度がなく平坦で円板状の脚部を呈する。柱状部は、上部から下部へタテ方向に丁寧なヘラミガキが施される。裾部は、横方向にヘラミガキ、坏部分も内外とも丁寧なヘラミガキが施されている。坏部は、浅く、やや平たい底部で体部は、少し丸味をもってやや開き気味に立ちあがり口縁端は、まるく仕上げている。底部と体部の境には稜をもたない。坏部は、内黒で内外面とも横方向にヘラミガキが施されている。

4は、脚部で柱状部が円筒形を呈する。裾部の形状は、裾部末端までなだらかである。柱状部は、上部から下部へタテ方向にヘラミガキが施されている。坏は内黒であるが、底部がわずかしか残っていないため坏の形を推測することはむずかしい。

壺形土器

頸部から口縁部にかけて外反し、胴部中央に最大径を有し、胴下部以下は、やすばまり底部は不安定な平底を呈している。調整は、内外面とも口辺部から胴部にかけてヘラミガキが施されている。

須恵器・坏

6は、高台付の坏で、口縁部は、逆八の字形にゆるやかに外傾している。高台は、端部近くに付され、太いものである。高台の接地面は、ほぼ平らである。焼成時の歪が著しい。

7は、底部から体部への立上がり部分は、ヘラケズリが施されており、口縁にかけてほぼまっすぐに立上がる。底部は、ほぼ平底で、ヘラ記号が見られる。内側底部は、ヘラナデ調整されている。8は、不安定な平底からゆるく弧を描くように開き、口縁端はやや外反する。外底面は不整方向のナデ調整されている。9は、7とはほぼ同型である。

翫

口頸基部が細く口縁部は、逆八の字形に上外方へ開いている。口縁端部付近で段をなし端部は、丸く仕上げられている。肩部にヘラびきの凹線1条をめぐらし、体部は、横歯状工具のようなもので施文されたと思われる刺突状の装飾が帯状に施され、その部分に上外方から下内方へ円孔が穿孔されている。体部の最大径は、 $\frac{1}{2}$ くらいに求められる。底部には、ヘラ記号が見られる。

平 瓢

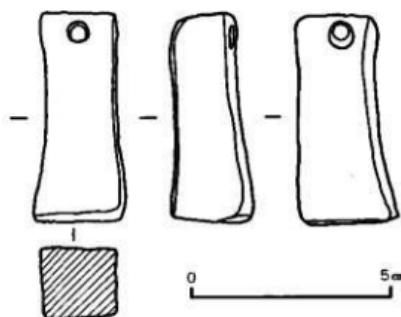
11は、全体的に丸味があり、天井部もふくらみ、肩部で稜をなし、底部に向ってゆるやかな弧を描いてすばまる。口頸基部は、やや太く短かくなっている。口縁部はラッパ状に拡がり端部で大きな稜をつくり、ほぼ直角に立上がる。底部は、やや丸みをおび不安定な平底である。

12は、口頸基部から口縁まで長い頸部を有し、ラッパ状に開いている。口縁端部は丸みをもつ。全体的に丸味がなくなり、天井部のふくらみも少くなり、体部の器高も低くなる。肩部で大きな稜をなし、底部にむけてほぼ直線的につばまっている。底部は平底である。

(7) 砧 石

石室内東壁寄りからの出土である。砧石面として使用した四面は大きく擦り減っており長期間使用されたことを物語っている。四面のうちほぼ平らな面は二ヶ所で、残りの面は、中央部がやや凹み、ゆるやかな弧状を呈している。砧石の一方に径6mmほどの穴が通っている。穴は中央部がやや小さく、両出口がやや大きくなっている。内部もよく磨かれている。全長5cm、一面の巾が2cm弱の小さな砧石であり、鐵鎌の刃部や刀子などに使用したものと推測される。

石質は粘板岩で、玄室内出土遺物としてはめずらしい。



第16図 砧石実測図

天王塚古墳出土土器

捲回番号	器 形	器 形 の 特 徴	調 整	胎 土	色 調	焼 成	その他の出土地
第 15-1 回	高 环 (环部)	体部は少し丸味をもって、やや開き気味に立ち上がる。	环内・外面ともヘラミガキ、ホゾの部分へラケズリ	雲母を多量に含む。精選されている。	茶褐色 环内黒	良 好	
2	高 环 (环部)	柱状部が太い	柱状部タテ方向のヘラミガキ	長石を多量に含む。	淡褐色 环内黒	良	
3	高 环	柱状部は円筒形で円板状の脚部。	柱状部タテ方向のヘラミガキ、环部内外面・底部ヨコ方向へのラミガキ	雲母を多量に含み、精選されている。	茶褐色 环内黒	良 好	
4	高 环 (脚部)	柱状部は円筒形を呈し、裾部の形状は裾部末端までなだらか。	柱状部タテ方向のヘラミガキ	雲母を多量に含み、長石も多少含む。精選されている。	茶褐色 环内黒	良 好	
5	壺	脚部中央に最大径を有し、不安定な平底。	ヘラミガキ	小石大~砂粒くらいの大きさの長石を含む。雲母を多量に含む。	淡褐色	良 好	
6	环	焼成時の歪が著しい高台付である。	ロクロの回転方向は左まわり	小さな長石を多量に含む。	淡褐色 一部青灰色	良 好	
7	环	平底で、口縁にかけてほぼまっすぐに立ち上がる	内側底部にヘラナデ	精選されている。長石を少し含む。	青灰色	良 好	
8	环	不安定な丸底、口縁端部はやや外反。	外底部ナデ調整	精選されている。	青灰色	良 好	
9	环	平底で、少し丸味をもってやや開き気味に立上がる。	底部ヘラケズリ	大小の長石を含む。	灰白色	やや良	
10	甌	口縁部が細く、口縁部は逆八の字形に上方へ開く。底部にヘラ記号、体部に穿孔された円孔の直径1cm。		小さい長石を含む。	青灰色	良 好	
11	平 瓶	全体に丸味があり、肩部で矮をなす。口縁基部は太く口縁部は短い。不安定な平底。		長石を多量に含む。	肩部から下は青灰色、天井部から一部口縁部灰白色	良 好	
12	平 瓶	天井部のふくらみが少なくなり、体部の器高も低くなる。	天井部の胎七が	長石を多量に含む。	肩部から下は淡褐色、一部黒褐色、天井部から口縁部灰白色	良 好	

第Ⅳ章 まとめ

天王塚古墳の発掘調査、遺構、出土遺物の状況は本文に詳しく記述したところである。ここでは、天王塚古墳の二、三の特色について記したい。

構築の状況をみたとき、周溝がはっきりせず、前縁部のみ周溝に沿って根石がすえられていること、石室の構築が自然石を用いた乱積みであり、裏づめが極めて少なく、石室がわずかに崩張りを示す箱形の退化した横穴式石室であること、副葬品については、盗掘があったことを考えても、直刀、鉄鎌、刀子、金環、須恵器、砥石と種類、数量ともに少ないことが注目される。また、前庭部よりまとまって須恵器、土師器などが出土したことは、墓前祭が行なわれたことをうかがわせている。

以上述べてきた墳丘、石室の形態、構築方法、副葬品等出土遺物の状況などからみて、天王塚古墳は7世紀後半、古墳時代後期に構築された古墳と想定される。

伊那谷は、善光寺平に次いで、古墳の密集地域であるがその中心は下伊那地方にあり、上伊那地方は少ない。現在、180余基の古墳が確認されているのみで、消滅したものも含めて400基を越えないものと思われ、また松島王墓古墳（県史跡指定、箕輪町）をのぞくと他のすべての古墳は規模も小さく、古墳時代後期のものと考えられている。上伊那地方における古墳の発掘調査例も少なく、中川村六万部古墳、伊那市名廻東古墳、阿原古墳、富士塚古墳、宮田村鳥林古墳など数基の古墳が調査されているのみである。それだけに、今回の天王塚古墳の発掘調査は、上伊那地方の古墳研究に寄与するところが大きいものであろう。

最後に、限られた期間の中で、しかも、上の林遺跡、箕輪遺跡と併行しての発掘調査と報告書の作成といったきびしい状況のなかで、発掘調査、遺物の実測、図版作成、原稿執筆と精力的に作業を行なってくださった調査員諸氏、の労が大であったこと、箕輪町、箕輪町教育委員会、上郷地区、特に箕輪町郷土博物館のみなさま方が、調査に全面的に御協力くださったことをここに記し、厚くお礼申しあげるとともに、天王塚古墳を、箕輪町郷土博物館の前庭に移築保存する大事業を敢行された箕輪町文化財保護審議会、箕輪町に敬意を表します。

（丸山敏一郎）

図 版



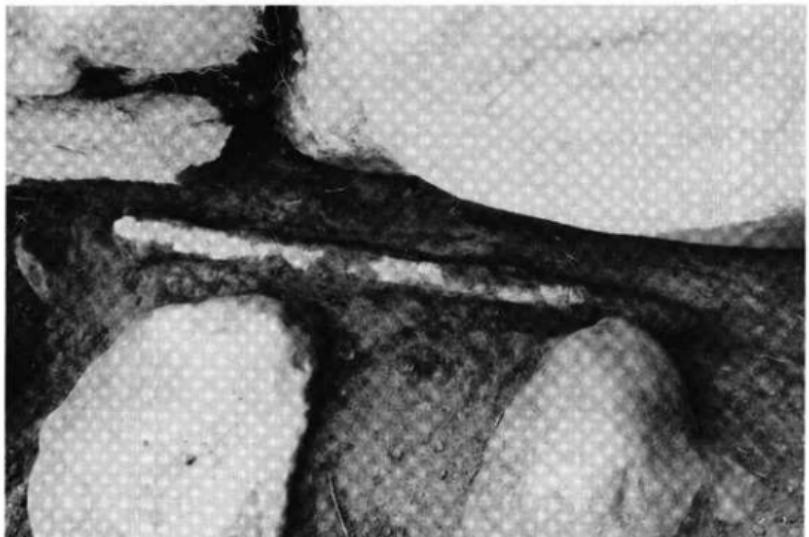
調査前の近景



発掘後の状況



調査進行状況



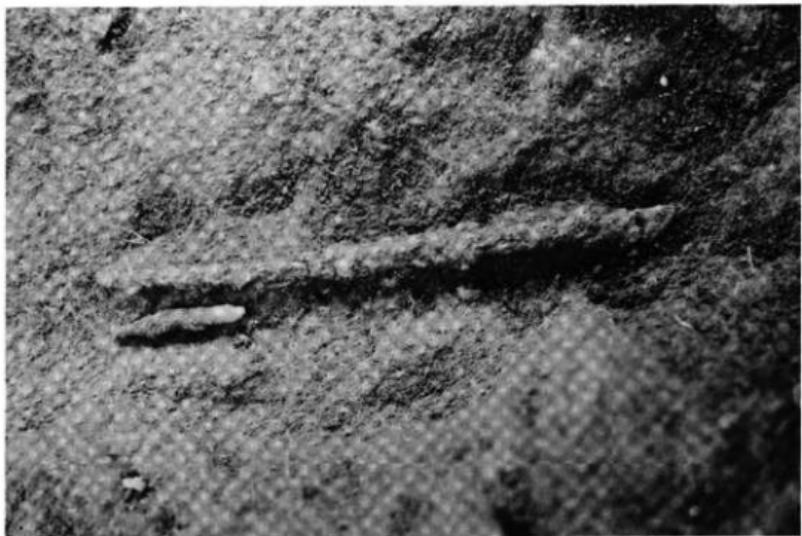
直刀出土狀況



骨片出土狀況



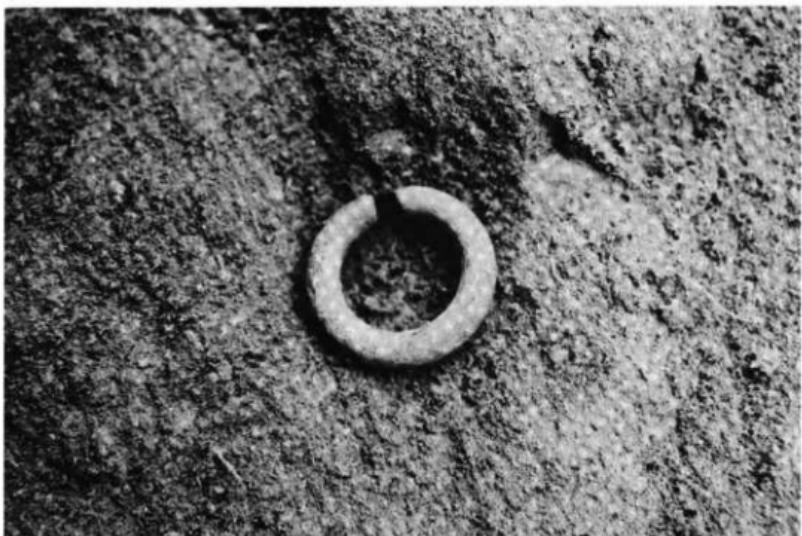
平根鎌出土状况



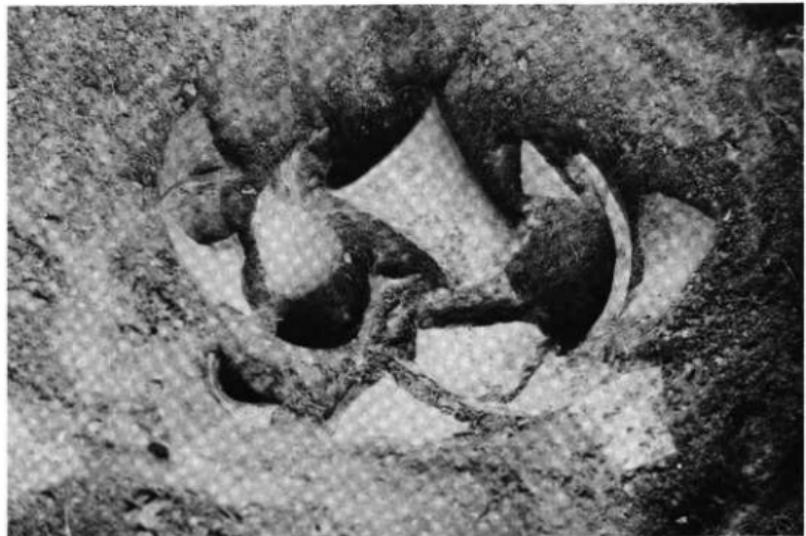
片刃鎌出土状况



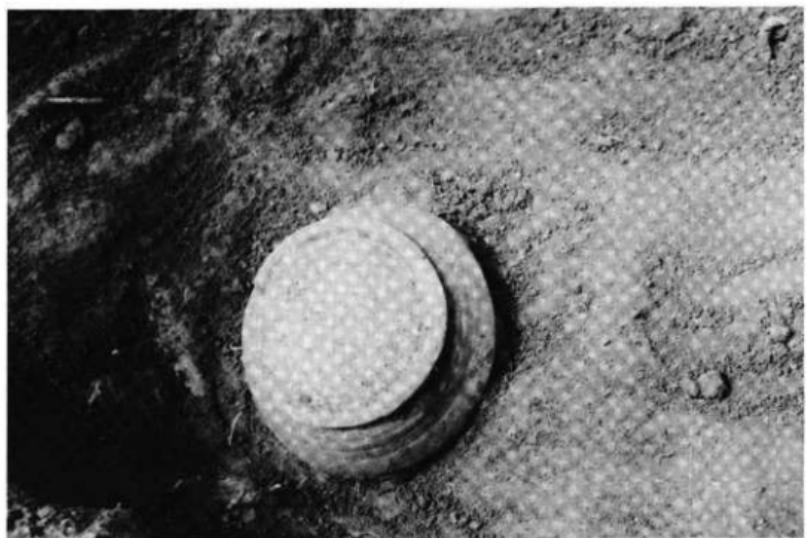
金環出土狀況



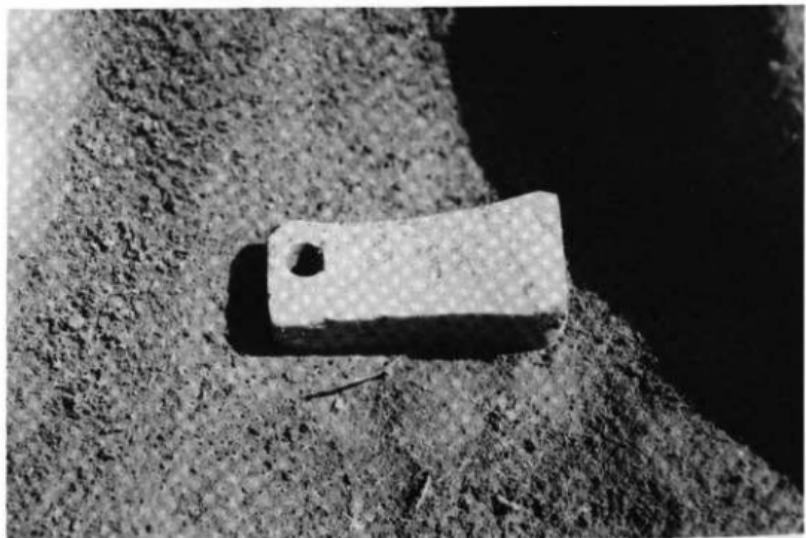
銅環出土狀況



平瓶出土状况



坏出土状况



石印出土狀況



刀子出土狀況



東側壁の状況



玄室内より外道部を見る



奥壁(鏡石)状況



玄室内配石状況



側壁裏積み状況



周溝及び土層状況



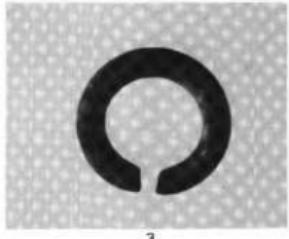
調査スナップ



1



2



3



4



5

出土金属器と延石



鉄盤



刀子



出土土器・須恵器

天王塚古墳
～緊急発掘調査報告書～

昭和58年3月31日 印刷
昭和58年3月31日 発行

発行所 長野県美輪町教育委員会
印刷所 伊那市 (株) 小松総合印刷所